

Generic is Specificはメタファーか  
—慣用句の理解モデルによる検証—  
鍋島弘治朗 関西大学 e-mail naby@muf.biglobe.ne.jp

## 1. 序論

(1a)は日本語のことわざであるが、タイ語にも同様の意味を持つ類似したことわざ(1b)が存在する。

- (1) a. 井の中の蛙  
b. kob nai kala (Thai)  
frog in coconut  
「ココナッツの中のカエル」

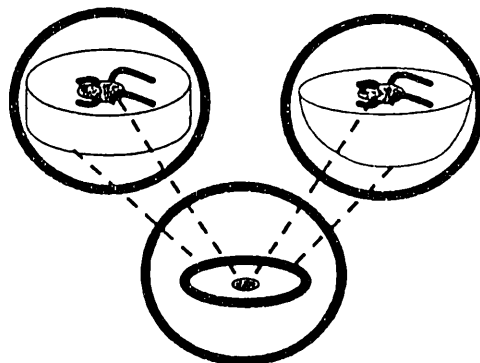


図1. 「井の中の蛙」と「ココナッツの中のカエル」

(1b)を聞き及び、日本語とタイ語のことわざはまったく同じだね、と言った人がいたが、(1a)と(1b)は厳密には異なる。カエルの存在する場所が「井戸」であるか「ココナッツ(の殻)」であるか、という相違である。一方、「井戸」と「ココナッツの殻」を「全く同じ」と感じてしまう気持ちも理解できる。すなわち、「小動物が狭い場所にいて外にでない」点では同じだからである。

「井戸」と「ココナッツの殻」を「全く同じ」と感じるの、どのような理由か。また、「井の中の蛙」という言葉から、「小さな社会にいて外の世界を知らず、自分はえらいと思い込んでいる自信過剰な人物」という解釈が得られるのはどのような機構によるのか。このような疑問への回答あるいは回答の糸口を提示しようとする試みが本稿である。

さらに、本稿のもうひとつの目的は、ことわざの理解に関するメタファーとして提示されたメタファー、Generic is Specific (一般性は特殊性である : Lakoff and Turner, 1989: 162-66) の取り扱いに関する提案である。このメタファーには後に挙げるようなさまざまな問題点がある。本稿では Generic is Specific をメタファーと考えることは止め、より一般的な Type-Instance の関係、あるいはカテゴリー関係に還元することを提案する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、序論である本節の後半でメタファーの定義について述べる<sup>2</sup>。その後、第2節で Generic is Specific メタファーを概説し、これをメタファーと考える問題点を挙げる。さらに、Generic-Specific という概念は、メタファーとは独立した概念として別途に扱うことが適当であることを主張する。この考え方に則して、第3節ではブレンディング理論(Fauconnier, 1997)流に Generic レベルを用いて、具体的なことわざを分析する。第4節としてまとめ、残された問題、今後の方向性に関して言及する。

### 1.1. 認知言語学におけるメタファーの定義

認知言語学の枠組みのメタファー研究では過去に、メタファーに関して以下のように述べられている。

## (2) メタファーの定義

- Metaphors are mappings across conceptual domains. (Lakoff, 1993: p.42)
- Metaphors are mappings from one conceptual domain to another. (Lakoff and Turner, 1989: p.112)
- ...conceptual metaphors are mappings across conceptual domains that structure our reasoning, our experience, and other everyday language. (Lakoff and Johnson, 1999: p.47)

いずれもmappingという用語を使用している。mappingとは写像あるいは関数で、複数の対応関係が想像できる。これは以下のように日本語に訳せると思われる。

(3) メタファーとは領域間の写像(構造的対応関係)である。

ところが、写像が存在してもメタファーでない例が存在する。次小節で「ママのクレジットカード」に関するジョークを Fauconnier(1997)から見る。

### 1.2 ママのクレジットカードの例

Fauconnier(1997:p.102)では、アナロジーの例として、漫画フランスでのジョークが出ている<sup>3</sup>。1コマ目では、フランスの友人、ジャックが自慢している。「僕のママは僕に自由にクレジットカードを借らせてくれるんだ」。2コマ目では、フランスがフランスのママにおねだりをしている。「いいなあ、ママ、僕もママのクレジットカードを使いたいな」。3コマ目で、ママは意外にもこう言う。「私はいいわよ」。フランスが目を輝かせると、4コマ目にオチがある。ママが続けて言う。「でもジャックのお母さんに確認してみてね」。つまり、フランスは、自分のママのクレジットカードを使うことを考えていたのだが、フランスのママは、フランスがジャックのママのクレジットカードを使うことを考えていたわけである。Jはジャック、Fはフランスとする。

母	Jの母	Fの母
母のクレジットカード	Jの母のクレジットカード	Fの母のクレジットカード
子供	J	F
子供が母のカードを使う	JがJの母のカードを使う	FがFの母のカードを使う

ここで利用されているのは、母と子の関係とその具体例としてジャックとフランス親子の写像(構造的対応関係)<sup>4</sup>である。しかし、この例はメタファーと感じられない。この例から留意したいのは、写像であってもメタファーではないものが存在する事実である。

## 2. Generic is Specificはメタファーか

## 2.1 Generic is Specificの概説

Lakoff and Turner (1989)では、(4)に挙げられたことわざの説明として Generic is Specific メタファー(以下GSと略)の存在が(5)のように述べられている。

(4) Blind blames the ditch (盲人はドブに文句をつける)

(5) There exists a single generic-level metaphor, GENERIC IS SPECIFIC, which maps a single specific-level schema onto an indefinitely large number of parallel specific-level schemas that all have the same generic-level structure as the source domain schema. (Lakoff & Turner 1989: 162)

(「それは一般性は個別性であるという一般レベルの隠喩であり、これによって特定レベルの図式が一般化され、その結果無数の個別的な図式にあてはまるのである。これらの目標となる図式は、どれも全体的なレベルの構造において根源領域の図式と共通している。」大堀俊夫訳)

このことわざを特定の事例に当てはめた場合の対応関係を解説する。SpecificをS1とS2、GenericをGとして表示する。

S1 目の不自由な人がそのせいでドブに落ちるが、本人は自分の目の悪さを棚上げにしてドブがそこにあつたせいにする。

G 自分に欠陥のあるひとが、そのせいで困った状況に陥るが、本人は自分の欠陥を棚上げにして、本質的ではない別のことのせいにする。

S2 大統領候補が、不正行為スキャンダルで大統領選から降りることを余儀なくされるが、本人は、自分の不正行為を棚上げにして、この話題を騒ぎ立てたマスコミのせいにする。

これらは、それぞれが、要素全体の構造が構造的な対応関係を持つとともに、要素それぞれも独自の対応関係を持つ。

<u>S2(目標(T)領域)</u>	<u>G</u>	<u>S1(起源(S)領域)</u>
スキャンダルを見通せなかった大統領候補	能力に欠如のある人	目の不自由な人
大統領選離脱を余儀なくされる	困った状況に陥る	ドブに落ちる
マスコミのせいにする	人のせいにする	ドブのせいにする

## 2.2 Generic is Specificがメタファーかどうかの検討

本小節では、GSをメタファーとするべきでない理由を挙げる。その議論は3点に集約される。まず、第1に一般的な定式化に反していること。第2にことわざであつてGenericスキーマを持っていてもメタファーと感じられない例が多数存在すること。第3は、認知言語学全般におけるGSの位置付けに関わる。認知言語学において、GenericとSpecificの関係はカテゴリー関係やType-Instance関係を基礎とした種と類の関係であつて、メタファーとは区別した方がよいという理由である。

### 2.2.1 GSはメタファーの一般的定式化に反している

まず、第1に、GSはメタファーの一般的定式化に反している。通常メタファーは起源(S)領域とサキ領域を結んでおり、Target is Sourceと定式化されている。理論は建物である(Theories are Buildings)と理解することは見ることである(Understanding is Seeing)でこれを例示する。

目標(T)領域		起源(S)領域
理論	←	建物
理論の基礎となる部分、前提的考え方	←	土台
理論の概要	←	骨組み
理論の説得力が失われる	←	建物が崩れる

図2 理論は建物である(Theories are Buildings)の写像

目標(T)領域		起源(S)領域
理解する	←	見る
理解する人	←	見る人
理解されるもの	←	見られるもの
理解を促進するもの	←	光
理解を妨げるもの	←	遮蔽物

図3 理解することは見ることである(Understanding is Seeing)の写像

すなわち、通常メタファーでは一般レベルは存在せず、個別レベルの2領域が存在するだけである。である。目の不自由な人の例で考えると、目の不自由な人と大統領候補のレベルということになる。

### 2.2.2 ことわざでGenericレベルを持っていてもメタファーでないものがある

第2に、ことわざでもメタファーでないものが存在することである。ことわざは「無数の個別的な図式にあてはまる」のであるからどのようなものでもGeneric is Specificのスキーマに当てはまると考えられる。しかし、「小人閑居して不善をなす」、「嘘も方便」、「腹八分目」などのことわざはメタファーと感じられない。以下にこれらの3つのことわざが複数の個別の図式に当てはまることを示す。

- (6) a. タナカ君は夏休み、部屋にこもってアイドルのフィギュアを作っていたが、父親に「小人閑居して不善をなす、だ。アルバイトにでも行ってこい」と叱られた。  
 b. ヤマダさんは、引退して自宅でゆったりとした老後を楽しんでいるが、「小人閑居して不善をなすですな、どうも酒の量が増えて」など謙遜している。

あまり立派でない人物	⇔	小人
家でじっとしている	⇔	閑居する
悪いことをしてしまう	⇔	不善をなす

図4 「小人閑居して不善をなす」の解釈 (メタファーの写像とは異なる)

- (7) a. ヤマダ院長は患者さんに病気の真因を隠していたが、そのために患者さんは元気が出て病状も回復に向かった。「嘘も方便とはこのことさ」と看護婦さんたちに自慢している。
- b. ヨシダ次長は社長へのプレゼンテーションで新プロジェクトの売上増加見込額を1.5倍と報告し、課員が待ち望んでいたプロジェクトの承認を得たが、係長に「あれ、やばくないですかね?」と聞かれ、「ま、嘘も方便だな」と自身ありげに答えた。

嘘	⇔	嘘
目的を達成するための便宜的な方法	⇔	方便

#### 図5 「嘘も方便」の解釈

- (8) a. アキラはバイキングパーティでステーキ、カツレツ、スパゲティなどを軒並み食いあさり、次の日までムネヤケと胃のもたれが続いた。「やっぱり、腹八分目にしておくべきだった」と悔やんでいる。
- b. ケンジは焼肉が好物だが、その日に限って「腹八分目」などといって上カルビ1人前で我慢していた。どうも彼女に何か言われたらしい。

食べること	⇔	腹
しすぎない	⇔	八分目

#### 図6 「腹八分目」の解釈

このように複数の個別事例がそれぞれのことわざで表されることから、これらのことわざは Generic スキーマを持っていると言える。にもかかわらずこれらの用例はメタファーと感じられないか、感じられる度合いが非常に低い。つまり、ことわざであって、Generic なスキーマを持っていてもメタファーでないものが存在するということになる。よってGSがメタファーである根拠は崩れることになる。

### 2.2.3 認知言語学における“Generic”の位置付け

GSが提唱された Lakoff and Turner (1989)の著者の一人である Turner は、その後 Fauconnier と共著で一連のブレンディング理論に関する論文を発表している (Fauconnier and Turner, 1996 など)。ブレンディング理論においては Blended スペースおよび2つの Input スペースと並んで、Generic スペースが存在する。メタファー理論とブレンディング理論は、理論として異なる。しかし、ブレンディングでもメタファーを取り扱えることが提唱されていることから、ブレンディング理論における Generic スペースとGSの Generic スキーマとは関連性があると考えるのが普通である。一方で、ブレンディングはメタファー特有の機構ではなく他のさまざまな分析に利用されている。すなわち、Generic という概念はメタファーに限らず利用可能かつ必要なものである。それであれば、Generic と Specific の関係をことさらメタファーとして規定する必要はない。

さらに、GSは種と類の関係であると積極的に主張できる。すなわち、畜人とドブの例をとれば、以下の対応関係が成り立つ。

- (9) a. 目の不自由な人は、能力に欠如のある人の一例である。  
 b. ドブに落ちることは、困った状況に陥ることの一例である。  
 c. ドブのせいにするのは、人のせいにするものの一例である。
- (10) a. スキャンダルを見通せなかった大統領候補は、能力に欠如のある人の一例である。  
 b. 大統領選離脱を余儀なくされることは、困った状況に陥ることの一例である。  
 c. マスコミのせいにするのは、人のせいにするものの一例である。

すなわち、「盲人」の例および「大統領」の例はどちらも一般的な「能力に欠如のある人」に対して、その個別例となっている。これは種と類の関係であり、これに基づいた喩は提喩と呼ばれるべきものである。レトリックの分類に関しては、佐藤 (1978)、瀬戸 (1995)、山梨 (1988)、初山 (1997)、森 (2002) などに詳しいが、いずれも種と類の関係に基づくレトリックは提喩としている。

さらに、グループμがメタファー(隠喩)を二重の提喩と分析したこと(森, 2002)は有名であり、提喩とメタファー(隠喩)には関連性があることが認められている。しかし、あくまで「二重の」提喩がメタファー(隠喩)であると主張されている<sup>6</sup>ことで、GSはいわば「一重」の提喩、提喩そのものである。

#### 2.2.4 Generic is Specific はメタファーではない

以上3点にわたってGSをメタファーと考えない方がよい理由を挙げた。まずメタファーの通常の定式を満たしていない。メタファーは通常個別レベルの2つものを対比するのであり、ことわざにおいても同様である。「盲人」の例がメタファーらしいのはこれが具体的な例(この場合大統領候補の例)に当てはめられたときであり、個別レベルと一般レベルの関係がメタファーなのではない。また、無数の個別的な図式にあてはまることわざでもメタファーでないものも数々存在するため、GSとメタファーの間に必然的な関係は見受けられない。さらにGSは一般的な種と類の関係と考えるべきであり、提喩と考えるべきでメタファー(隠喩)と考えるべきではない。

### 3. ことわざの Generic スペースを用いた分析

本節では、前節の Generic スペースの考え方を受け、ことわざの理解にどのようなメタファーやその他の機構がかかわっているかを見る。ことわざの理解に関してスキーマ化した理解のレベル(Generic レベル)が存在することを前提とし、日英のことわざから、3.1 井の中の蛙、3.2 空き樽は音が高い (Empty Vessels make the greatest sound.) 3.3 鶏口となるとも牛後となるなかれ、を取り扱う。

#### 3.1 井の中の蛙

井の中の蛙の例では、少なくとも2つのカテゴリー的共通性と2つのメタファーが関わっている。まず、カテゴリー的共通性としては動物カテゴリー(人間とカエル)および容器/場所カテゴリー(社会と井戸)である。人間を人間以外の動物で表すことは寓話などで頻出するので動物が出てくればそれが人間を表していることをは極めて簡単に判断できると思われるが、元々は同じ動物というカテゴリー的共通性が鍵になっていると考えられる。

一方、メタファーとしては次の二つのものが考えられる。Understanding is Seeing(理解することは見

ることである)と Narrow-minded is Small(偏狭なことは小さいことである)である。カエルが井戸の中にいるということから「外の世界が見えない」すなわち「外の世界のことを知らない」意味になる。一方、後者のメタファーは特に過去に記述されていないが、(11)のような例を考えるとその存在は容易に想像しうる。

- (11) a. There were a prince with a big heart and a princess with a small heart.  
 b. 彼は心が広い/狭い  
 c. 彼は(器が)大きい/小さい

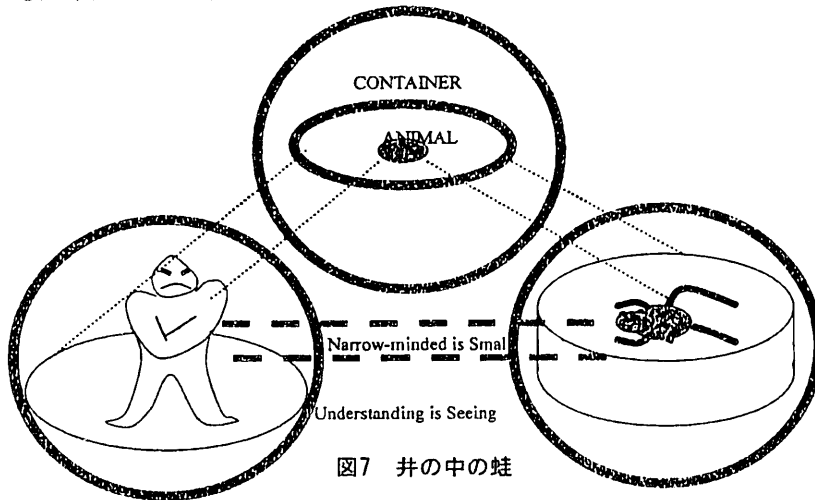


図7 井の中の蛙

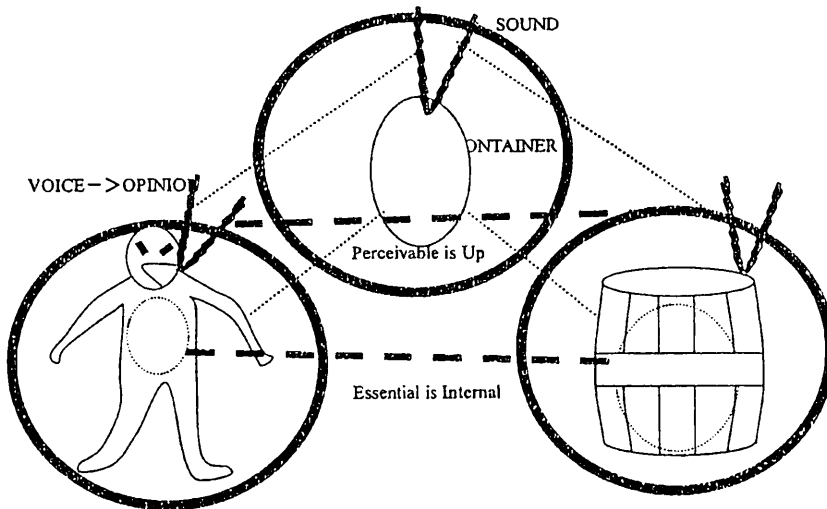


図8 空き樽は音が高い

### 3.2 空き樽は音が高い (Empty Vessels make the greatest sound.)

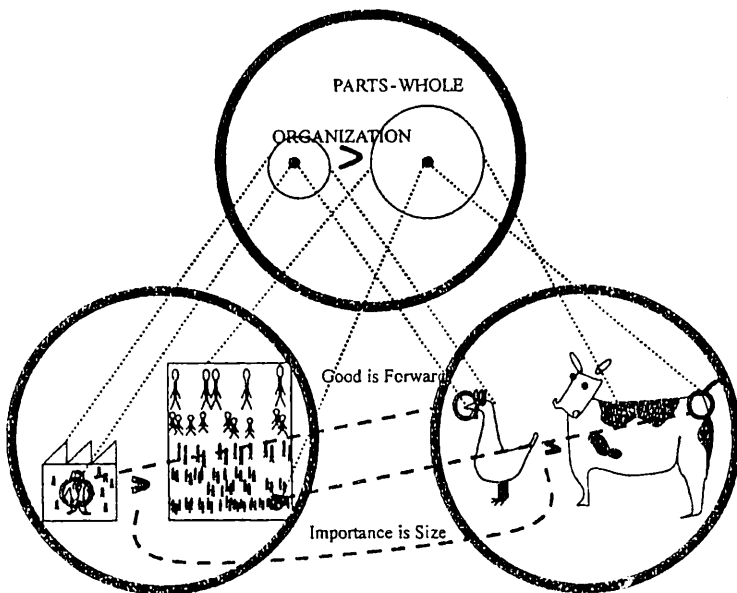
「中身のない人は概して威勢良く大きなことばかり言う」という意味のこのことわざには、少なくとも2つのカテゴリー的共通性、1つのメトニミー、二つのメタファーが関わっている。カテゴリー的共通性としては、容器(人間と樽)と音(声と樽の響き)である。人間を「樽」と捉えることは稀でも、体は容器、心は中身と考えるメタファーは頻出する。このメタファーを前提とすれば、人間と樽が容器としてカテゴリー的に共通性を持つ。一方、「声」も「樽の響き」も「音」という上位カテゴリーを持っている。さらに、「声を上げる」ことは「意見や主張を述べる」ことであり、これはメトニミーと考えられる。

メタファーの方は、Essential is Internal(重要なものは内部である)と Perceivable is Up(知覚できるものは上である)である。両者とも Grady(1997)に記述されているメタファーである。樽の中身がないことが、人間として内容がないことに対応し、音が高いということが主張が激しいことを意味している。

### 3.3 鶏口となるとも牛後となるなかれ

有名なこのことわざには、少なくとも2つのカテゴリー的共通性と2つのメタファーが関わっている。まず、起源(S)領域に「鶏」と「牛」という二つ参加者が存在することが例えば二つの企業体などに対応する。ここには、組織は生命体である、といったメタファーが存在する可能性もある。さらにそれぞれの参加者(鶏と牛)の身体部位(口と尻)が話題になる。これは二つの組織の異なった場所ということで全体-部分の関係が両方の領域で対応している。この2つがカテゴリー的共通性である。

次にメタファーとしては、Good is Forward(良いことは前向きである)と Importance is Size(重要性は規模である)が存在する。両方とも Grady(1997)に記述されているメタファーである。そこで、このことわざは前後と大小というプラスの価値観を示す2つの軸が背反する時(大きい組織の後ろか小さい組織の前か)どちらを優先すればよいかについて述べたことわざである。「口」が「前」を意味するのはややわかりにくい、「牛後」との対比から判断可能であろう。なお、「前」が企業などの「トップ」(えらい人)に対応するのは、企業などが目的を持って目的の達成に向かって進む移動体と捉えられるからだと考えられる。





#### 4. 結論

本稿では、Lakoff and Turner (1989) で提唱された Generic is Specific メタファーはメタファーと考えるべきではないことを主張した。その理由としては、定式化に当てはまらないこと、さまざまな事例に当てはまることわざでもメタファーと考えられないものが存在すること、認知言語学の理論内で Generic is Specific はカテゴリー関係と分析した方が妥当である、という3点である。

本稿のもう一つの貢献は、メタファーとしてではなく、いわゆるカテゴリー関係を示すものとして Generic レベルを想定し、これを利用して、ことわざの分析を提示したことである。Generic レベルをメタファーとしてではなくカテゴリー関係として捉えることにより、ことわざの理解の過程がより明確になったと考える。

本稿の指し示す方向性は、メタファー、カテゴリー関係、メトニミーなどのさまざまな認知機構が連携して事象の理解を構成しているというエコロジー的な考え方である。また、本稿では十分に触れることができなかったが、Generic レベルとイメージ・スキーマや価値的類似性などの関連は今後の課題である。

#### (注)

<sup>1</sup> Sruangsuda Vongvatchana さんのご教示による。また、フィリピン語にも同様のことわざがあるらしい。

<sup>2</sup> 通常、序論では認知言語学におけるメタファー理論の概説を行うが、本稿では紙面の都合と読者層の前提知識レベルの高さを考え、これを割愛する。必要に応じて鍋島(2001a)などを参照。

<sup>3</sup> この例のご教示は大阪大学井元秀剛先生による。

<sup>4</sup> 本のタイトルからわかるように、Fauconnier 自身もこれらの関係を mapping と呼んでいる。

<sup>5</sup> 複数回答による。

<sup>6</sup> 森(2002)ではメタファー(隠喩)が二重の提喩として分析できる場合とできない場合があることを例示している。

#### 主要参考文献

Fauconnier, Gilles. 1997. *Mappings in thought and language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 1996. Blending as a Central Process of Grammar. in Goldberg ed. *Conceptual structure, discourse and language*. Stanford: CSLI publications.

Grady, Joe. 1997. *Foundations of meaning: primary metaphors and primary scenes*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

———. 1999. A typology of motivation for conceptual metaphor: correlation vs. resemblance. In Gibbs, R. and G. Steen, eds, *Metaphor in cognitive linguistics*. Philadelphia: John Benjamins.

池上嘉彦 1981 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店

Johnson, Mark. 1987. *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.

河上誓作 編著 1996. 『認知言語学の基礎』 研究社出版

Kovecses, Zoltan. 2002. *Metaphor: A practical introduction*. Oxford: Oxford University Press.

- 楠見 孝 1990 比喩理解の構造 芳賀 純・子安増生(編) メタファーの心理学 誠信書房
- Lakoff, George. 1987. *Women, fire, and dangerous things*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上馨作他訳 『認知意味論一言語から見た人間の心』, 紀伊国屋書店, 1993 年)
- 1993. The contemporary theory of metaphor. in Ortony, A ed. *Metaphor and thought*. Cambridge University Press. Cambridge.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- 1999. *Philosophy in the flesh*. New York: Basic Books
- Lakoff, G. and M. Turner. 1989. *More than cool reason: a field guide to poetic metaphor*. Chicago: University of Chicago Press. (大塚俊夫訳 『詩と認知』, 紀伊国屋書店, 1994 年)
- Langacker, Ronald 1991. *Foundations of cognitive grammar. Vol 2: Descriptive application*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Makkai, Adam. 1972. *Idiom structure in English*. Mouton: the Hague.
- 初山洋介 1997 「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—『名古屋大学国語国文学』第 80 号
- 森雄一 2002. 隠喩は二重の提喩か? 『成蹊大学文学部紀要』第 37 号
- 鍋島弘治朗 2001 a. 『悪に手を染める』—比喩的に価値領域を形成する諸概念『大阪大学言語文化学 10』
- 2001 b. 『『可能性』はなぜ『薄い』のか—比喩の合成と衝突が生産性を抑圧する場合』『Proceedings to the 25 Annual Meeting』 関西言語学会
- 中右実・西村義樹 1997. 『構文と事象構造』 研究社
- Nomura, Masahiro. 1996. The ubiquity of the fluid metaphor in Japanese: a case study, *Poetica*, 46.
- 佐藤信夫 1978. 『レトリック感覚』講談社学術文庫
- 瀬戸賢一 1995. 『空間のレトリック』海鳴社
- 山梨正明 1988. 『比喩と理解』 東京大学出版会
- 2000. 『認知言語学原理』 くろしお出版